



# ローマ、ヴァージ、ピラネージ

鳥越 輝昭

(非文字資料研究センター 研究員)

このたび完成した『18世紀ヨーロッパ生活絵引』は、18世紀のロンドン、パリ、ミュンヘン、ウィーン、ヴェネツィア、ローマに暮らした人々の生活ぶりを、当時に制作された絵画や版画を素材として解説し、図版に見られる事物などの名称を明らかにしたものである。絵引の制作に当たっては、執筆の前段階として、図版の探索と選別作業も伴った。図版の探索から執筆までの全工程について、パリは熊谷謙介先生が担当し、ミュンヘンとウィーンはブッヘンベルゲル先生が担当した。わたくしの担当したのは、ロンドン、ヴェネツィア、ローマの3都である。

わたくしが絵引の制作過程で得た大きな収穫のひとつが、版画家ジュゼッペ・ヴァージ (Giuseppe Vasi, 1710-1782)の発見だった。ヴァージは、この時代のローマの様子を詳細に描いた版画をじつに238点も収める『ローマ古今の偉容 *Delle Magnificenze di Roma antica e moderna*』(1747-1761)を残してくれていたのである。

ヴァージは、シチリア島の町コルレオーネの出身である。この小さな町は、小説と映画の『ゴッドファーザー』(小説1969; 映画1972; 1974; 1990)のなかで主人公一家の出身地とされた場所で、映画でも一家が里帰りしたときの町の様子が映し出される。興味深いことに、イタリア語版のウィキペディアでこの町の紹介を見ると、町出身の有名人としてマフィアの親分たちの名前が並んでいるから、小説と映画がここをドン・コルレオーネ一家の出身地にしているのも宜なるかなと思える。しかし、町出身の有名人のなかにジュゼッペ・ヴァージの名前はない\*。イタリアでも、一般にはヴァージは忘れられてしまっているらしい。

ヴァージは技量のすぐれた版画家だった。上記の大作も残した。18世紀当時には、ローマの景観を描く版画家として人気もあった。それがなぜ、後世には忘れ去られてしまったのか。答えは、この版画家が同時代のローマの様子を忠実に描き出した、まさにそれゆえであった

だろう。後世は18世紀のローマにほとんど関心を持たなくなつたのである。

ヴァージとは対照的に後世の人たちに関心を持たれつづけたのが、ピラネージ (Giambattista Piranesi, 1720-1778)である。ピラネージはじつはヴァージの弟子である。ピラネージは、ローマ景観版画の第一人者だったヴァージの工房で景観版画の作り方を学び、のちに独立し、やがて人気の点で師をしのぐようになった。ピラネージが世に知られるようになったのも、ローマ景観を描き出した銅版画によってであり、それは『想像の牢獄画集 *Carceri d'invezione*』(1745-1750)が注目される以前のことだった。

ピラネージの人気がヴァージを上回るようになった理由のひとつは、版画の表現法にある。ピラネージはヴェネツィアの出身で、ローマでしばらく修行したのちに故郷に戻り、そこでティエポロやカナレットのようなヴェネツィア派の先輩画家たちの絵画から、明部と暗部を連続的に表現する技法を学び、それを銅版画に応用した。ピラネージの版画は、景観の正確な再現を旨としたヴァージの版画とくらべて、ドラマティックな明暗表現の点で勝り、それが世の嗜好に合致したのである。しかし、ピラネージの画業が後世に生き延びた理由はもうひとつある。それは、ピラネージが18世紀当時のローマを描くことに関心を持っていなかったことである。

ヴァージとピラネージが、同じ素材を取り上げた版画をくらべてみると、ふたりの違いがよく



図1 Vasi, Chiesa di S. Maria a Trevi. © 2008 University of Oregon.



図2 Piranesi, Veduta della vasta Fontana di Trevi anticamente detta l'Acqua Vergine. Wikipedia Commons.

わかる。ひとつは、ローマの名所「トレヴィの泉」を描いたものである〔図1、図2〕。

ヴァージとピラネージの違いは、画のタイトルにすでに明瞭にあらわれている。おもしろいことに、ふたりとも「トレヴィの泉」という画題はつけていない。ヴァージは画を『トレヴィの聖マリア教会 *Chiesa di S. Maria a Trevi*』と名付けた。ヴァージのいう「トレヴィの聖マリア教会」とは、「聖マリア・イン・トリヴィオ教会 *Chiesa di Santa Maria in Trivio*」のことで、画中では、泉の左奥に小さくファサードを見せている。画題の付け方には、一面で、18世紀当時ローマを支配していたローマ教皇庁への配慮が感じられるし、もう一面では、ヴァージ自身が18世紀当時の「近代」に関心を持っていたことが窺い知られる。この画の素材になっている建造物を見ると、泉そのものはヴァージが描いたころは完成間際だったし、背後の宮殿は1730年代の完成、一番古い聖マリア・イン・トリヴィオ教会も1570年代に完成したバロック様式である。ヴァージは、彼にとっての「近代ローマ」の「偉容」を描き出そうとしているのである。

ピラネージの画題の付け方は、ヴァージとは対照的である。ピラネージは画を『「トレヴィ」と通称される「処女の水道」の大泉の透視画法による景観 *Veduta in prospettiva della gran Fontana dell'Acqua Vergine detta Trevi*』と名付けた。画題にいう「処女の水道」とは、古代ローマにこの場所まで、はるばる飲料水を届けていた水道の名前である。「トレヴィの泉」は、この古代の水道を18世紀に再建し、その到達点につくった泉である。画題のこの付け方を見ると、ピラネージが眼前の泉の背後に古代ローマの水道を重ねあわせているだけでなく、関心の中心が、眼前の泉よりもむしろ古代ローマの水道の方にあることがわかる。

この2枚の版画よりもさらにふたりの違いが明瞭に見られるのが、「フォロ・ロマーノ」を描いた版画である〔図3、図4〕。

ヴァージが画の主要な素材としたのは、当時はフォロ・ロマーノにあった「聖マリア・リベラトリーチェ教会」（=解放

者聖マリア教会）である。ヴァージは、このバロック様式による、彼の時代には「近代」の建物を画の中央に置き、画題も『聖マリア・リベラトリーチェ教会 *Chiesa di S. Maria Liberatrice*』とした。

それとは対照的に、ピラネージは、ヴァージとほぼ同じ場所を描いた版画にまったく別のタイトルをつけた。ピラネージがつけたタイトルは *Veduta del Sito, ov'era l'antico Foro Romano*、日本語に直訳すれば、「かつて古代ローマのフォロ・ロマーノがあった場所の〔現在の〕景観」という意味である。ピラネージのころ、かつての「フォロ・ロマーノ」は「雌牛の野（カンポ・ヴァッチーノ）」と呼ばれ、文字どおり、牛や羊の放牧地として使われ、古代ローマの遺跡は半ば地中に埋もれたまま顧みられなかった。だがピラネージは、眼前の光景の背後に、古代ローマの様子を重ね合わせているのである。

しかもピラネージは、画のなかで聖マリア・リベラトリーチェ教会を左隅に押しやり、ファサードを半分切り落としている。この建物を無視しようとしたのだといってよいだろう。そのかわりに目立たせてあるのが、左から3分の1あたりに立っている3本の円柱である。これは古代ローマ時代の神殿の残骸である。さらにピラネージは、この版画を「絵引」化して、下端に画中の事物の解説をつけているのだが、画のなかの細流については、それが古代ローマの大下水道「クロアカ・マクシマ」に流れ込んでいると書いたり、画の中央あたりに見える円筒形の建物について、古代ローマ時代にロムルスとレムスが発見された場所だと書いたりするのである。

ヴァージとピラネージの死後80年が過ぎるころには、新興のイタリア王国政府をはじめとして、多くの人々の関心は、栄光の古代ローマに向かうようになった。その思潮のなかで、放牧地だった「フォロ・ロマーノ」は発掘されてゆき、邪魔になった聖マリア・リベラトリーチェ教会は破壊された。おなじ過程のなかで、その教会を画題の中心としたヴァージも忘れ去られたのである。

聖マリア・リベラトリーチェ教会が破壊される一方で、古代の神殿は完全に掘り起こされていった。ピラネージの画『かつて古代ローマのフォロ・ロマーノがあった場所の〔現在の〕景観』は、その過程を先取りしていたことになる。時代の関心が、かつてのピラネージの関心のあり方に追いついたといってもよいだろう。

\*本稿の校正段階でイタリア語版ウィキペディアにヴァージの名が加筆されていることがわかった。



図3 Vasi, *S. Maria Liberatrice*. en.wikipedia.org.



図4 Piranesi, *Veduta del sito, ov'era l'antico Foro Romano*. ©Trustees of the British Museum.